

「岩手山麓カラマツ」の生い立ち



吉 田 耕

① はじめに

当署管内、岩手山の北側山麓の緩斜面から、前森山中腹にわたり、日本一と折紙付きの通称「岩手山カラマツ」の大森林が横たわっております。

樹令は五十五年から六十五年、平均胸高直径二十六cm、樹高一八mから二六m、そのha当り蓄積は約二〇〇m³から三〇〇m³もありますが、今では数回にもわたる農地解放、度重なる伐採等で約七〇〇haを残すだけで、このせわしい世の波にのつてか、あと数年もまたその雄大な姿が失われそうな状態であります。

ところで植付当時は三、〇〇〇haとも五、〇〇〇haとも言われていたこの大森林が、当時どのようにして造林されたのだろうか？

元来の物好きがたたつて、ヤジ馬気を起し、署の蔵庫にもぐりこんで、あちこちひつかき回りましたが、残念なことにそれらしい記録は全然見つかることができませんでした。

思いあまつて地元の古老達に、あれこれたずねまわったわけですが、何しろほとんどが米寿前後の老人達だけに、思い出してこれと言おう方が無理、ようやくこれと見つけ出したのが当時人夫頭をしていたという西

根町平笠の高橋弥四郎老人、この老人明治十五年生れ（八十四歳）とは見えない元氣者で、記憶もはっきりしており、「折があつたら、誰かにぜひ話しておきたかつた。」と喜んで昔のことをいろいろ話してくれた。

ポツリ、ポツリではあるが、なつかしさを感じさせるような顔をコタツにもたせながらの温かい話しぶりがうれしかった。

さて、これからしばらくはこの高橋老人と一しよに、やがては姿を消してゆく室の山の生い立ちをふりかえつてみることにします。

② あらまし

明治三十四年ごろから同四十三年まで



(530 林班)
やや立木度の多いところで、樹高15m前後の広葉樹が混生している。
(カラマツha当り約260m³ 800本)

の間に、多い年で八〇〇ha、全部では三〇〇〇haとも五〇〇〇haとも言われている位植林したのであるから、機械力を導入した現在の技術、量に比べてみていかん大事業であつたかがうかがわれます。

当時は、相続く凶作の救農対策とも言われておりますが、日露戦争前後の国勢興隆期において、村（現在の西根町と松尾村）をあげての大事業でもあつたわけでもあつたのです。

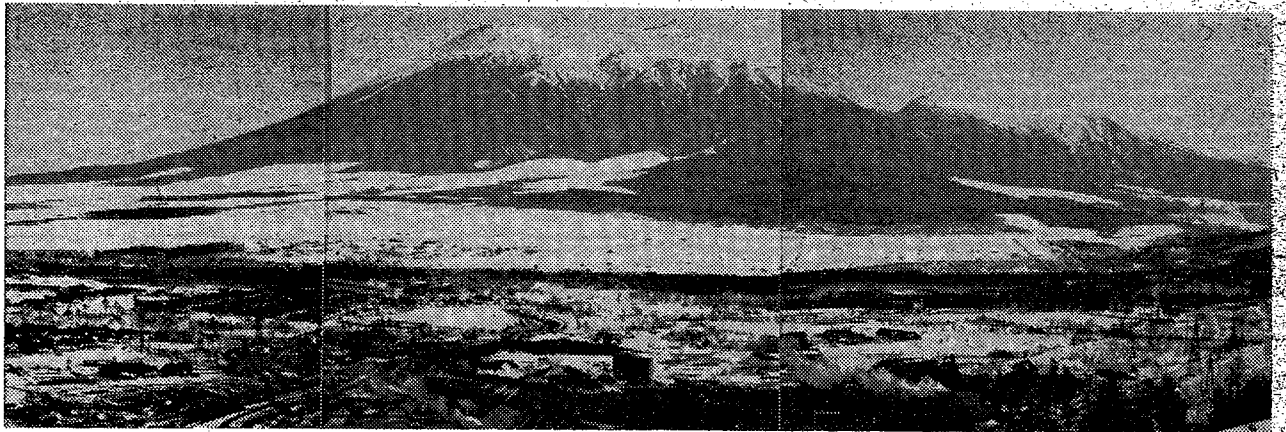
ここでは、主として集中的に施行された岩手山ろくを中心にした話を進めてみることにします。

③ 植林前の岩手山麓

この山ろくは、昔から馬の放牧地で、樹木は「ナラ」「カシワ」「アカマツ」の



(五三一林班)
代表的な大径木材で広葉樹は伐採済（先行伐採）
(カラマツの胸高直径二四cm〜三八cm
樹高 二三m〜二七m
ha当り約三〇〇m³、六〇〇本)



岩 手 山 (手前の黒い台地は松尾鉾山)

稚樹が少々あつただけで、大部分は「芝生」「萩」が密生した原野であつて、平笠部落からでも放牧馬がみられたくらいで、当時ほどこの家でも馬の飼育が盛んで、毎朝のごとく露かぶりながら萩刈りに出かけるのが日常作業の一つでもあつたのです。

もちろん、土地は表土もかなり固く唐鍬で起すのも普通の山地とはかなりの差があつたし、腐しよく土ではなく草の根のかたまりのような層をなしていたと思われまふ。

又この山麓は、表土の下一m位からは小豆粒位の火山砂であるため雨水もすぐ地下にしみこみ、地表には全然水が残つていない状態で、「カエル」「ヘビ」等湿地を好む動物はほとんど見ることがなく、わずかに「ネズミ」「ノウサギ」等の小動物が夏になればいくらか姿をみせるだけで、総じて生きものは少かつたのではないかと思われまふ。

「マワント行カネカ、アノ山カゲニ、オ馬コ育テル萩刈リニ。」(南部外山節)さしずめ、このような原野だつたとでしよう。

④ 植林の始まり

あまり前口上が長くなつてしまいました

たが、そろそろ本番に入ることになります。

まず、初めに柵目のごとくに張りめぐらした防火線のことですが、植林前に森林主事(今の担当区主任)がコンパスで測量し、一区画約六〇〇m×八〇〇m前後に区画して、幅一八尺(五・五m)から二四尺(七・二m)程の表土をはぎとり、山火事防止に備えた。(現在は主として林小班界となつてゐる)

作業は、ほとんど請負形態で一人一日に長さ二間位(四m前後)よりできず、中には測量杭を見失ない、夜になつてから「チョウチン」をつけて目印しにし、真つすぐに目安をつけて作業を進めたこともしばしばだつた。

また、この防火線は一時的には苗木の仮植地にも利用されたようです。

次に苗木ですが、産地はどうも当時の植生分布から考えて信州カラマツではなにかと思われまふ。事実長野から送られて来たとはつきり話をしてくれた老人も数人あることから、ほぼ確実であると思われる。

なかには、盛岡(厨川附近)にあつた苗畑(民間の苗畑と思われまふ)から来たものもあると言う老人もありましたが、種子は長野からとり、育苗だけしたもの

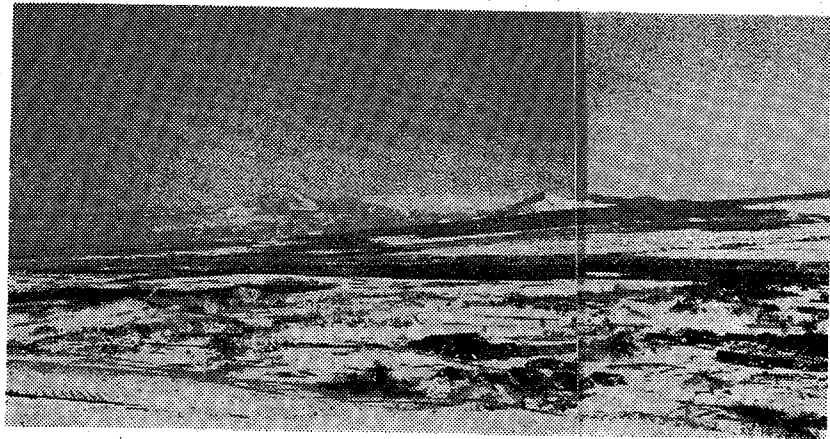
で運ばいかど考えられます。

当時は、国鉄花輪線も開通しておらず(開通大正八年)好摩駅で貨車から卸された苗木を馬で、しかも馬があつても馬車と言うものがなかつた(本当に)時代だつたので、馬の背に「ダンコ付」(馬の背に振り分けに荷付けること)して、まる半日もかかつて運搬した。(好摩駅から岩手山麓までは五km〜二〇km)苗木はほとんど大きく、平均三尺位(一m)もあり、それをコモ包みにしただけであつたが、いつも早めに植え付けるため葉はほとんど出てはおらず、だいたい良い苗木ばかりであつたようです。

植付時期も、大体植え付けを終つてから田植えにかかつたので、ほとんど苗の芽の開く前に終り(五月中旬頃)、若干実行された秋植えも葉の落ちる頃(十月中旬ころ)に行つたようです。

仮植は、すぐ植え付けるものはそのまま束で土をかぶせ、長びくときは一応束をほどき、一列に「ウネ立て仮植」をしたが、水がなかつたためか、土仮植だけだつたようです。

地拵は、草ばかりなため、普通の草刈鎌でけつこう間に合い、一人で一日一反歩(〇・一ha)もこなすときもあつた。(その頃は、日の出から日没まで働いた



山 神 姫

又一説には、一斉に火入れをし、火の止まったところまで植林したと言われていますが、高橋老人の外にも否定している老人もあり、大げさな火入地ごしらえはなかったと思われる。

植付のときは苗木を「コダス」(竹、つる等で織つて作った背負籠)に入れて歩き、植え付け方法は、土が固く、しかも草の根がしつかりしまつていたため、まず唐鍬で草の根張に切目をつけてめぐり(第一図)下の固い土を十分くだき、あまり深くならない程度に苗を植え、めくつた草の根張りを元のようにもどしてふみつけたが、後で枯損がほとんどなかつたのは、この草の根張のために乾燥が又秋植は霜害が防げたのではないかと思われます。又土中にかん木の根が少なかつたので、一人で一日四〇〇本位も植えるのが普通だつた。

植付本数は、一反歩(〇・一ha)六〇〇本と言っていますが、地元民達の話から推定してみても、かなり多く植えたらしく、六〇〇本はともかく相当密植されたことはたしかかなうで、アカマツ稚樹(天然)の発生しているカ所には補植か

ので、約一〇時間位も働いていたと考えられます。(アカマツ稚樹(天然)のあるところ(ほとんど岩石地)は、そのまま残し、広葉樹小径木は伐採して薪にしたり、焼いたりしたが、火入れ地拵はしなかつた、と言うのは、全般的にカヤよりも萩が多かつたので、昔から山焼きはしておらなかつたようです。

坪植様に植付けたところも多かつたようですが、いずれにせよ苗木だけでも相当な数量で、苗木を運搬する馬子の行列

が、春の岩手山と相まつてこの地方の例年の風物詩でもあつたことでしょう。

苗木が大きかつたのと、密植が重なり植栽後の山は、まるで三年〜四年もたつた造林地のようなつたさうです。

枯損は殆んどなかつたので補植は全然実行しない今でも、この地方ではカラマツは山へ植えてもぜつたい枯死しないといひ伝えられております。

話は前後しましたが、この山ろくには水が全然無かつたので、苗木と同様に毎日部落から馬の背に樽をつけて飲料水上げたこと等からも、地元の馬が、この大事業に重大な役割をはたしたことがうかがわれます。

⑤ 保 育

下刈は苗木が大きかつたためか、二回位より行わず、草刈鎌でも間に合い一人で一日一反歩半(〇・一五ha)位刈り、除伐はつる切りと合せて行い弱木を伐倒する程度に数回にも分けて実行したが、概してもともと原野だつたためか、特にこれといった保育はやらなかつたようです。

間伐は歩くことさえも困難なくらい立木度が多かつたため、何回(三回以上とも五回位とも言われている)にも分けて

行い、現在のようない理想的な残立度になつたものであります。(大東地区)

ちなみに、松尾地区の高海拔地域(七〇〇m付近)は、間伐木の搬出が困難だつたためか今でもha当り二、〇〇〇本近くもあろうかとみられ、胸高直径も一〇cmから一八cm、樹高も一五mから一七m位よりなく、しかも成長の遅れと合せて、雪のためにほとんどの立木が、わずかではあるが根曲りとなり、木材としてはかなりの品質低下が認められ、間伐の効果が判然としていくことがわかります。

枝打は二〇年生ごろ部分的に一時行われたこともあり、一〇尺(三・六m)位の階子をかけ、下枝を切り卸したが、成長が早いため巻込が良く、現在気をつけて製材品をみると、たまに枝打ちした跡をみつけることがあります。全然枝腐れ、抜け節がみとめられません。

⑥ 保 護

まず、一番はじめに先枯病のことが考えられますが、若干何かの原因で、やや枝の枯れるのはあつたようでもあるが、特に今のような被害は記憶がないと言っているところから、現在の先枯病は発生しなかつたと思われれます。

虫害については、一時、体長一寸五分

(五羽)位もある黒カタのついた毛虫が大発生したことがあり、その数も大変なもので、林内ではフンの落ちる音が雨のように聞こえるほどで、その被害地は、遠くからでも赤色に変色したのが認められるほどだったそうです。

害虫の種類は「マイマイガ」か「マツケムシ」ではなかつたかと思われませんが、当時は薬剤もなく、手袋をつけて一匹ずつ取って袋に入れ、集めてから石油(灯油)をかけて焼き殺した。

また、蛾(成虫)もとれと言われて夜間にあちこちで石油を燃やしてみたが、あまり効果はなく、ために一匹ずつ取るより仕方なかつた。この害虫も、ふしぎに二年位でガラリといなくなり、被害木はまた新しい芽を出して回復し、枯死したものはなかつた。

そのほか、近年(昭和三十七年頃)カラマツツツミノガがかなり発生したが、今のところは下火になっております。

ネズミ、ノウサギの害はほとんどなく、山火事も数回あつたが、小さいものばかりで植え替えずほどの被害はなかつたようです。

⑦ その他の付随事業

生産部門では数回にわたり間伐を施行

し、ほとんどは直営で実行したようです。

カラマツの種子も一時期(昭和二十七年頃前後)に採取したが、そのころの木は四十年生前後で立木一本から四貫匁(一五匁)も採れるものもめづらしくなく、春(五月頃)には花をつけた枝が柳のように垂れ下がるのを調べて歩き回つたそうですが、現在では、樹が老化期に入つているためか、又は枝があまり枯れ上りすぎているためか、結実している樹は少く、採取事業としてはあまり期待できない状態と考えられます。

⑧ 当時の労務事情(出役状況等)

ちょうど日露戦争前後で、国勢が興隆していた時代とは言え、不景気だったため、地元の現金収入は少く、唯一の現金収入源でもあつたので、地元民はこぞつて出役し、一日に数百人に達することもめづらしくなく、五〇名位に一人いた人夫頭も五名〜七名位もおつたそうです。賃金は、人夫頭で一日五十銭、男四十銭、女二十八銭〜三十銭と、当時としてはかなり条件がよかつた。又日露戦争の最中(明治三十七、三十八年)は、男よりも女と老人が多く、さしずめ今の一部の農村のようだったとうかがわれます。

⑨ 造林後の現地の変化

まず土壌ですが、現在では適潤性黒色火山灰土壌(やや乾燥ぎみ)(BIDa)で、当時は有機物が不足していた固い乾燥性土壌(BIb)であつたのが、今ではカラマツの落葉の堆積によりA層が厚くやわらかになつたことはたしかであります。

このため、植生も当時とはかなり異なり、昔あつたヤセ地を好む「萩」「芝生」等は今殆んど見られず、かわつて広葉樹(主としてナラ、ウリハダカエデ)の侵入がいちぢるしくなつて来ております。(ha当り二五mから〜三〇m)

茸類も殖えて来ており、自然動物も多くなり、みられるようになり、ノウサギ、タヌキ、キツネ、キジ等がはんしよくし、樹木の生育に比例して、山全体が生命力を作り上げたことがよくわかります。

⑩ 心腐れについて

発生の度合は、カ所(地域)によりかなりの差がみられますが、多いところでは立木数の四〇%を越えて発生しているところ(五三一林班)もあります。

心腐れの程度は、地上から二mないし三m位までが空洞となり、「アリ」が巢

食つていたり、カステラ状にフヤケております。特に材積の占める率が大い部分だけに、相当考えさせられるところがあります。

原因については、「カイメンタケ」「ナラタケ」病菌によるものと言われておりますが、私なりに立地条件の点から、次のことがらが病原菌の侵入の誘因となつたと考えております。なお、これについては「ぞうりんNo.35号、掲載の京大赤井博士の記事を参考にしました。」

(a) 樹令によるもの、間伐のとき(二〇年生〜三〇年生)にはほとんどみられなかつたと聞いていることからですが、これは心材の老朽化により病菌におかされやすくなつたのではないかと

(b) 風、雪のため根がゆるんだため、このときに切断したり、枯死したりした細根から病菌が侵入したものかと考えられます。特に十数年前に一部皆伐したとき、防風林状に伐採しないで残されたカ所には、かなり多く認められておりますが、残さないで伐採したものは、伐採当時にはほとんどみられていなくなつたと聞いております。

(c) 乾燥地、岩石地に比較的多い、特に岩手山地域西側の土壌の深いカ所は少く、東側の岩石地の多いカ所に来るに

したがって多発しています。これは、岩石の間げき等から、根が乾燥する割合が多く、そのため病菌の侵入が容易になったのではないか。

(4) (5)と似たものでありますが、表土の浅いカ所にも多く発生しており、これは栄養的な問題があるのではないかと考えます。つまり病菌への耐抗性の問題と考えられます。

以上まとめて考えられるのは、樹高差にはあまり関係なく、局所条件に左右されるものではないかと考えられます。

⑪ 伐期についての私見

⑩のことがらについての推察と、当地区のカラマツの地位(おおむね二等)成長量、伐期伐種、利用区分、販売価格等を考え合せて、新生林分については三十五年から四十年位が伐期として最適ではないかと思えます。

⑫ 傾斜による根曲りについて

根曲りは、岩手山ろく(大更地区)のよくな緩斜地にはほとんど見られないのが、前森山麓(松尾地区)の高海拔七〇〇mあたり地域は、ほとんどが地上一mないし一・五mぐらい樹幹が曲つているのがみられます。

この地域は特に雪が深く、(二mないし三m)かつ風が強いのに加え、平均胸

高直径が比較的小さい(一〇cm〜二〇cm)(特に四七四、四七六林班)ため、長年間にわたり、これら風雪害の自然条件により被害を受けたものと思われる。

予防策としては、間伐回数を多くして早く大径木にし、風雪害に耐えるように保育することであると考えられます。

⑬ 海拔高と成長について

わりあい高海拔には強い樹種であるのか、岩手山ろくでは七〇〇m位までは胸高直径も樹高も大して違いはなく、八〇〇m位になってやや差がみられるぐらいです。これが前森山ろくでは、成長の差がかなり大きいのが認められますが、むしろ立木本数が岩手山ろくより多いところから、間伐度の差であるとみられる方が強いようです。

カラマツは、高海拔地域の広葉樹の更替樹種としては大いに適当しているものと考えられるので、風雪、先枯病等を防ぐため、防風林を設定するのが必要と思えます。

⑭ 植栽本数

ha当り六〇〇本(現在の二倍以上)も密植したと言われていますが、理由は、はつきりわかりません。おそらく、次のことがらが考えられます。

まず、最初から補植を省略することにしましたのが、風雪害対策か、又は苗木事情がよいのに加え、地拵や下刈が比較的安全費で済んだため予算的に植付に経費を使うことができたためかと考えられます。

とにかく、こんなに密植しても、除伐間伐等の伐採木はすべて最大限に利用されたのですから、決してムダではなかつたわけです。

⑮ 天然アカマツ(前生樹)との共存の効果

当時、アカマツ稚樹の発生カ所には補植状にカラマツを植えたことを記しましたが、それらのアカマツは今では、樹高形質共ならカラマツに劣ることなく、大きな樹幹をみせ、植栽当時の残存効果の大きいことを示しています。

ただ、いく分胸高直径が小さきみに感じられますが、生立本数が一〇%ないし二〇%位多いのと、価額がカラマツよりもやや高価なので、売払時においてはあまり相違ないものと思われれます。

又、このような火山灰地帯にはアカマツは最適地とみられますが、大体海拔高六〇〇m位が限度のようです。

⑯ おわりに

以上が、高橋老人が昔を思い出しながら

ら語ってくれたものに、私見も加えて記したのですが、今さらながらこの大梅林が、労苦と努力の結しようから生れたことであるのがうかがわれます。

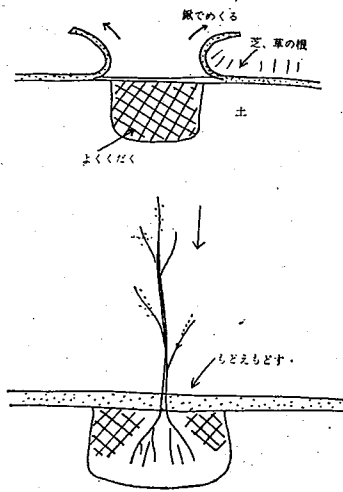
「武蔵野」のような詩情は感じられないかも知れないが、一步このカラマツ林に足をふみ入れると何か、さしせまつてくるような男性的なものを感じるの、この梅林の偉大さなのだろうか。又、この樹林に圧倒されるからなのだろうか。苗木を運んだ馬はトラクに、鎌はブツシユクリナーやウニモクトラクターに、手鋸はチェンソーに変つた。今日、荒れた山麓に一大変化をもたらし、そしてこの眠れる山を目ざまし、活かしたこの大事業をふりかえつてみることは、そのまま歴史の流れをたどつてみることもあり、また、先人達の労苦と努力をしのび、そして技術を学ぼううえにも決してムダではないと思えます。

そのためにも、ごく小面積でもよいから参考村として、当時のおもかげの一部を後世に残したいと望むものであります。

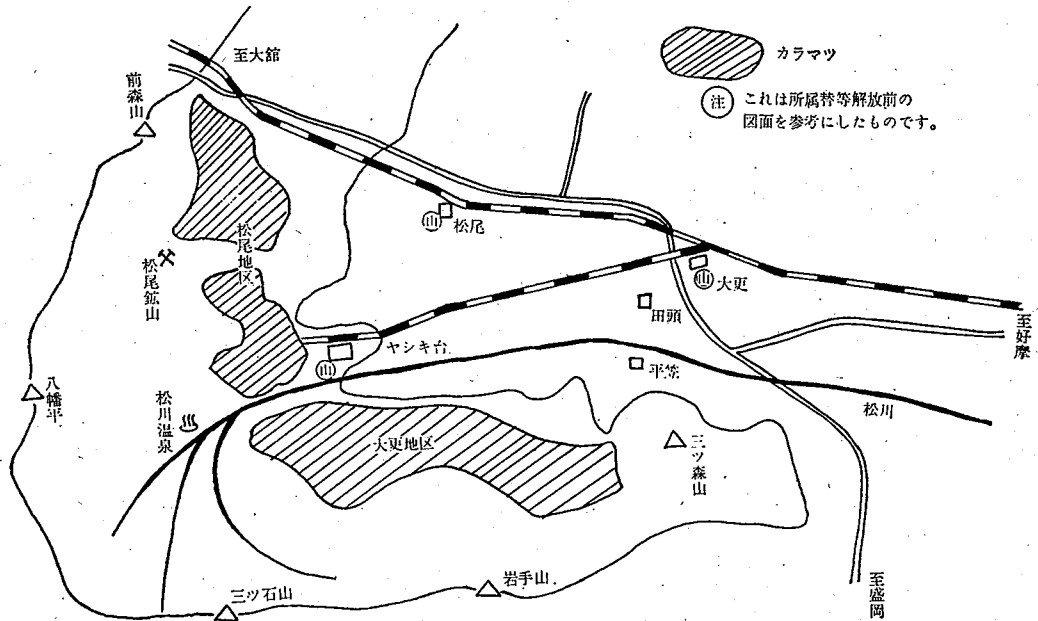
おわりに、高橋老をはじめ、この事業につくした古老達の長寿を祈ると共に、いろいろな面で協力してくれた西根町平笠の吉田与四郎氏(当署岩手山製品事業所班長)には深く感謝いたします。

(岩手管林署松尾担当区主任)

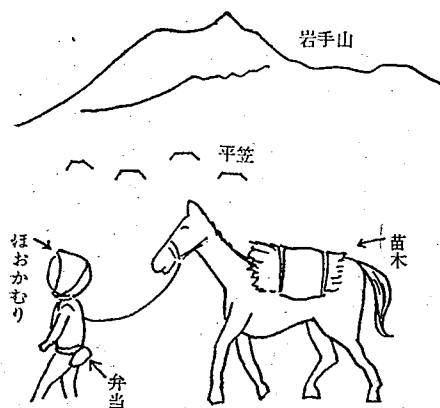
第1図 植付方法断面図



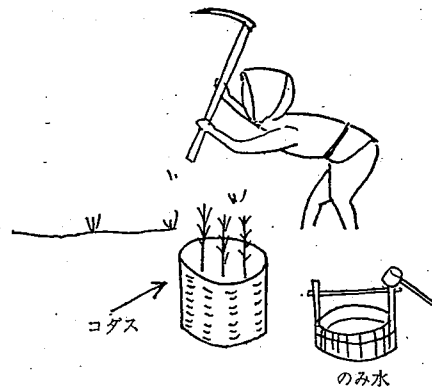
第2図 見 取 図



苗木の運搬の図 (ダンコ付)



植 付 の 図



夜に防火線測量の図

